



FUJI WOMEN'S UNIVERSITY

No.67

Jan.20, 2019

藤女子大学
広報

藤



みんなで作る
ランチプレート



左右:新科目「ライフステージ栄養学」での実習 北16条キャンパス調理実習室

CONTENTS

- 巻頭言～御家族とも連携する未来共創～／2
- 藤女子大学の国際交流／4
- チャペル棟完成「聖マリア聖堂」献堂／6
- 教職課程での特別連続講座「北海道の教育」について／9
- 私のカレッジライフ～チャレンジ編 Part2～／10

巻頭 一言



御家族とも連携する 未来共創

学長 ハンス ユーゲン・マルクス



一昨年来掲げている「藤女子大学未来共創ビジョン」においては、これまで主として「教職員・学生・卒業生」の三位一体を共創の主体と位置付けてきましたが、今回の巻頭言のため「学生・教職員・保護者・卒業生とのかかわりの意義」という宿題を賜ったことを嬉しく思っています。なぜなら、学生に加えて、とりわけその御家族も共創の重要な主体であることを痛感しているからです。

まず、何よりも大事なのは、宿題の真っ先に上がっている学生の活発な関与です。幸いに、ビジョンの発表後新校舎の一階にラウンジ（愛称：Maria Lounge）ができ、二階には「i.Learning Space」（愛称：アイランズ）が開設されました。今や、どちらも学生が個人やグループで自由に活動する場となっています。さらに、この一年間、特にカトリックセンターのおかげで、学生ボランティアが著しく活性化してきたことを喜んでます。今後は新たな全学的な取り組みとして、授業評価や満足度調査などの従来の評価システムに加えて、学生が自由に意見や要望が出せるシステムの構築が望ましいでしょう。

申すまでもなく、教職員の自主的な関与も甚だ重要です。大学の使命を担う第一人者は教職員であり、藤に対しては、教育、研究、社会への貢献の三つのうち、地域社会は特に一番目の教育を重要視しているのでしょう。実際に、現在まで藤が学生と保護者に選ばれてきたのは、よい教育が期待できる、という評判があったからです。これを未来につなげるため、教職員に学生中心、かつ、個性尊重の思考と行動の一層の徹底を期待します。なぜなら、一人ひとりの学生が、まさにオンリー・ワンの一個人として、大切にされている、と引き続いて評価される藤には、必ず未来がある、と確信しているからです。

これまでのブランドの形成や保持に大きく貢献してきた要因の一つは、藤なら、わが子を大切にしてくれる、と各

世代の保護者から寄せられてきた信用であったに違いありません。これを今後とも保ち、かつ高めるためには、学生の御家族との連携を強化することは、重要な課題になるでしょう。幸いに、そのための手がかりもできています。人間生活学部では二年に一度保護者懇談会が開かれ、昨年で六回目となりましたし、加えて、姉妹校で行われる大学説明会では同時にミニ・保護者懇談会も実施されています。未来共創の一環として、学長も関わる全学的な広がりが望ましいでしょう。

現職についてから卒業生に接する機会によく恵まれています。そのたびに、卒業生が未来共創のたいへん頼もしいパートナーである感触が深まります。同時に、代々の藤生を大切に育ててくださった諸先輩への感謝の念にあふれます。開学以来の念願であったチャペルは、昨年の秋に出来上がりました。そこで月一度、学長司式のミサが執り行われます。参加は自由です。毎度、卒業生と学生ボランティアが協力して、場を盛り上げてくれます。これも、やはりミッションスクールである、藤女子大学未来共創への頼もしい取り組みである、とたいへん嬉しく、かつ心強く思っています。



ドイツから来日中の殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会総長 Sr.マリア コルデイス様（右）が来学されました。（2018年10月25日）



社会貢献推進会議 議長 小山 清文

2017年に策定された「藤女子大学未来共創ビジョン」のうちの「地域とつながる藤」の推進をめざし、昨年度「藤女子大学未来共創フォーラム」を開催したのに引き続き、2年目の今年度は、「いのち・社会・女性～藤から地域社会への発信～」というテーマのもと、全4回にわたり実施しました。その概要を以下に示します。

■第1回 6/2(土)

「いのち・人間・魂のお話～地域医療60年の経験から」(講師：方波見康雄氏 医療法人社団慈佑会 方波見医院医師)

■第2回 7/7(土)

「女性のキャリアとライフデザイン」(講師：岩崎裕美子氏 (株) ランクアップ代表取締役/鈴木志のぶ氏 北海道大学教授、コーディネーター：木脇奈智子氏)

■第3回 10/20(土)

「文学から読み解く女性と社会～もの言う女/口籠る女～」(講師：小山清文/関谷博氏)

■第4回 11/10(土)

「女性の生きづらさと社会的支援～さまざまな居場所づくりの実践～」(シンポジスト：野口恭子氏 藤幼稚園園長/高野香氏 NPO法人Kacotam/西川真子氏 ピアサポートグループholoholo、コーディネーター：隈元晴子氏)

今年度は、本学教員の他に、元教員や卒業生の方々に講師を務めていただきました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。以下、今年度の全フォーラムにご協力いただいた人間生活学部の隈元晴子先生より、内容について紹介させていただきます。

他者に依存する人生、依存しない人生
—フォーラムを終えて—

人間生活学部 食物栄養学科 准教授 隈元 晴子

女性の「生きづらさ」は時代とともに一つひとつ取り除かれ、自己実現する女性が増えたように思います。そのロールモデルとして、女性が働きやすい会社づくりを実現された岩崎さんや研究者としての道を歩んでこられた鈴木さんからは、他者に依存せず自分で生き方を選択し、自立した人生を送る姿に力を与えられました。この姿こそが古代・近代文学から読み解くことのできる女性たち、つまり男性に人生を委ね、時代に翻弄される姿とは大きく異なる点であり、現代は女性の生き方の多様性や自主性が尊重される社会になったと言えるでしょう。それでもなお、女性が生きづらさを感じるのはなぜでしょうか。本フォーラムを通じて、さまざまな生き方の選択肢が与えられる一方で、正解のない混沌とした世界を生きることの難しさが浮かんできました。「正解がない」ということは基準がないことを指し、自分自身のあるべき姿を「他者」との比較という尺度でしか測れなくなることです。そうすると、自分の中の欠落した部分に焦点が当てられ、ありのままの自分に不満を感じるようになります。このように、他者のあり方に対する認知の歪みによって自分自身を認められないことが、今の時代の「生きづらさ」の根底にあるのかもしれない。

方波見先生は、生きることは「欠如の充足を他者に委ねること」であり、それは「自然といのちの摂理である」と語られました。そして今の時代は「他者依存」という考えを忘れて、これは虚無感を埋めるために他者に寄りかかる「依存」を意味するものではなく、自分自身を知り、自分に足りないものを他者から受け取ることで、互いを高め合うということです。時として「依存しないこと」を自立と捉え、孤立していく人が多いように感じる今、「依存」の意味を問い直し依存しやすい環境を作ることが、変化し続ける時代を生きるうえで大切なのではないのでしょうか。このように女性が抱えるさまざまな問題について考え、女子大から発信する意味は大きいと思いました。





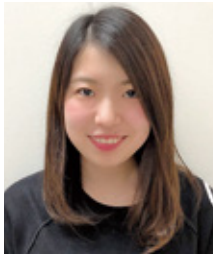
藤女子大学の国際交流

ただいま海外留学中 ～カナダ～

藤女子大学の「カナダ半期留学」は、カナダ協定校に約4か月間留学するプログラムです。英語力の向上を目指し、大学付属の語学センターで留学生のための英語授業(ESL)を受講します。参加者に、留学中の生活について紹介してもらいました。



ホストファミリーの子どもたち



カルガリー大学留学中の生活について

文学部 英語文化学科 2年 T.Rさん

カナダ留学の開始当初は、現地の生活に慣れるのに精一杯でしたが、今は大分余裕が出てきて、藤女子大学をはじめ日本の大学から留学中の友達、さらには様々な国からの学生と共に留学生活を楽しんでいます。私の参加しているプログラムでは午前中にGrammar, Reading & Writing、昼休みを挟み午後Speaking & Listeningの授業を月曜日から木曜日まで、金曜日は午前中のみ受けています。

クラスには世界各国からの留学生もいて、私はこの留学で初めて外国の友達とできました。その友達と会話する時は英語で話しますので、授業で学んだ英語を実際に口に出して会話することが自分の英語力の向上に大きく影響し、自信につながっていることを身に染みて感じています。また、週末は学校のアクティビティ・プログラムに参加してカナダの文化を学んだり、実際に体験したりしています。

私のホームステイ先は4人家族で、両親と2人の息子と生活しています。最初はとにかく緊張していましたが、積極的に話しかけてくれ、私を家族の一員としてホームパーティーや買い物にも連れて行ってきて、充実した留学生活を送ることができています。

自分では意識していなくても日常的な会話の中で耳が英語に慣れてきていたり、使える英語が増えていることに気づき、英語圏での日常生活がとても貴重な時間だと感じています。残りの留学生活も仲間と共に楽しみながら、有意義な毎日していきたいと思っています。



バンフの風景



仲間たちとハロウィンパーティー

海外留学報告 ～台湾短期研修～

「台湾短期研修」は、台湾協定校の輔仁大学に2週間留学するプログラムです。藤女子大学を含む、輔仁大学の日本の協定校の学生たちと、中国語や台湾社会について学びます。2018年の夏休みに研修に参加した学生の感想です。



台湾短期研修に参加して

文学部 日本語・日本文学科 2年
N.Yさん

日本では目にする事のなかった外壁のない廊下は、私が今まさに海外にいることを強く感じさせてくれました。

到着したのは夜だったので、1日目は台湾にいるという実感があまりなかったので、次の日の朝初めて輔仁大学の構内に入った時に、異国を感じて感激したものです。全てが新鮮で面白く、授業そのものも文化体験なのだと思いました。語学の授業では、十数人ごとにクラス分けされるため、皆と仲良くなることができます。台湾の友達だけでなく、日本各地に友達が出来たのもこのプログラムの利点です。

この留学プログラムでは台湾の文化に触れる充実した2週間を過ごせます。また現地の方々と関わることで、中国語をもっと学びたいと思わず、ぜひ多くの人に体験してほしいと思います。



文学部 日本語・日本文学科 1年
I.Nさん

研修初日、私は中国語が上手く話せず落ち込んでいました。後日、お店で食べ物を買おうにも中国語のメニューが読めない私は、メニューを指差し、勇気を出して店員さんに一言「這是什麼(これはなんですか)?」とだけ質問しました。すると、相手は英語や身振りを交えて親切に説明してくれました。そうして徐々に言葉を覚え、最後には中国語で注文ができるようになりました。わずか2週間の留学ですが、多くの文化や言葉を学ぶことができました。例えば、台湾のお茶はとても甘いこと、屋台で買ったおいしい食べ物の名前が「ダンピン」ということ、台湾の人達は優しいということ。どれも当たり前のような知識かもしれませんが、あの時質問することを諦めていたら台湾の料理の味や名前、台湾の人を知る機会は無かったと思います。貴重な経験となりました。



人間生活学部 海外研修報告

オーストラリアで得た経験と出会い

人間生活学部 食物栄養学科 2年
K.Yさん



2018年2月23日から12日間の日程で人間生活学部の海外研修のためオーストラリアに飛びました。空港から留学先のグリフィス大学へ直行し、到着するとホームステイ先の家族が迎えてくれました。私のホストファミリーは、3歳の双子と両親の4人家族でした。初日は、みんなとゆっくり過ごし、翌日はプールや買い物に連れて行ってもらいました。

3日からグリフィス大学での授業が始まり、女性のロレイン先生が、英語で授業を進めていき、オーストラリアや英語についてたくさん学びました。午後はその日によって違ったプログラムが立てられ、食品を扱っている企業の見学や、先住民のアボリジニの方との交流、グリフィス大学の学生とお茶会等を行いました。私が通っていたのはオーストラリアのブリスベンにあるキャンパスが中心でしたが、研修の後半にはゴールドコーストにあるキャンパスまで遠征し、学生と一緒に調理実習をしました。レシピも調理中の会話も全て英語で最初は戸惑いましたが、生地を型に入れてオープンで焼くなど、基本的な調理方法は日本とは大差なく、なんだか料理が共通言語のようで、とても楽しい実習でした。最終日は、これまで学んできたことの総仕上げとして、英語でのプレゼンテーションでした。それぞれ伝えたいことをテーマから考え、ロレイン先生と一緒に準備を重ねました。発表会には、ホームステイ先の家族を招待できるため、案内状を家族に渡すと、ママは仕事だからパパが来てと言っていたのですが、当日は二人とも来てくれてとても嬉しい反面、ちょっと恥ずかしい気持ちにもなりました。私は“モーニング娘。”を中心に日本のアイドルについてプレゼンテーションしました。アイドルは日本ならではの文化であることを説明するのがとても大変でしたが、無事発表を終えるとママが微笑みかけてくれ、帰りの車中ではパパが「アイドルは日本ではメジャーで当たり前存在なの?」と質問してくれたことで、自分が話したいことや伝えたいことがきちんと伝わったように感じました。

最初はごちなく、全然英語も話せない私でしたが、帰る頃には双子の子ども達と一緒ににごっこやぬいぐるみで遊んだり、パパやママともとても仲良くなれました。

お世話になった感謝の気持ちを込めてクリスマスには、カードを贈ろうと思います。こんな素敵なホストファミリーやグリフィス大学でのたくさんの人との出会いは、この研修だからこそ味わえたものだと思います。この研修で得たものを大切に、勉強や様々な人との繋がりを大切にしていこうと思います。



海外協定校からの 留学生紹介

2018年4月から藤女子大学で学んでいる3名の留学生をご紹介します。
藤女子大学や北海道は、留学生の目から見てどんなところでしょうか。

藤女子大学ではどんな 勉強をしていますか?

留学生のための日本語の授業以外に、日本人の学生と一緒に学部授業も履修できることが、私が藤女子大学に留学を決めた理由の一つです。台湾の大学では、日本語を専攻していたので、日本語の「読む」「聞く」「話す」「書く」を総合的に学んでいましたが、藤に留学に来てからは、これまで身につけた日本語を実際に生かし、専門的な授業が受けられて非常に嬉しいです。特に後期には、日本語授業の数も少なくなったため、興味のある学部の授業を多く取りました。心理学、美術、文学、映画などの授業を、日本人の大学生と一緒に受けることは、難しいこともありますが、個人的にはとても勉強になり、将来的にも有利な経験となるだろうと思っています。



L.Yさん
(台湾出身)

何か部活に入っていますか?

4月に行われた新入生歓迎会で、箏曲部の演奏を聞きました。先輩たちがきれいな姿で弾いた“嵐”の曲が素晴らしく、深い感動を覚えました。私はもともと伝統的な文化に興味を持っていたので、箏曲部に入ろうと思いました。初心者から、曲が弾けるようになると、達成感が湧き出てきます。また、箏曲部の部員と一緒に練習したり、演奏したり、大学祭や合宿に参加したりできて、非常に良い思い出になったと思います。



C.Kさん
(台湾出身)

北海道のどのようなところに行きましたか?

7月に富良野にラベンダーを見に行き、10月にドライブで函館、室蘭と旭川に行きました。室蘭の地球岬が大好きです。上海は東シナ海に面するのですが、このように青くて綺麗な海があまり見えません。風が強かったですが、ぼんやりしたいくらい素晴らしかったです。『枕草子』の「潮の満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが」という歌を思い出しました。



Y.Yさん
(中国出身)

チャペル棟完成 「聖マリア聖堂」 献堂

CHAPEL
聖マリア聖堂

北16条キャンパスに本学創立以来の念願であったチャペル「聖マリア聖堂」が完成し、創立記念日の9月28日に、献堂ミサが行われました。勝谷太治司教様の司式により、設計・建築関係者、教職員、卒業生、マリア院のシスターたちなど大勢の方々に祝福されたスタートとなりました。

このチャペルは「聖マリア聖堂」と名付けられ、聖母マリアのいつくしみ深い母としての愛のご保護のもとに捧げられています。そのため、左側の壁に聖母子像が置かれています。

正面には復活されたイエス様のご像が掲げられています。十字架に架けられたイエス様は、祭壇の上の十字架にあります。また、壁側の大きな柱には、14枚のレリーフが架けられており、これは「十字架の道行き」と呼ばれるもので、イエス様がローマ総督ピラトから死



刑の宣告を受ける場面から、十字架に架けられて息を引き取り、お墓に葬られるまでの14の場面を表しています。向かって右側の前から進み、左側の一番前で終わります。イエス様のご受難・ご死去を黙想しながら一つ一つ歩み、そして最後に正面の復活のイエス様に至ります。

今年度から誕生した本学の聖歌隊が、白いガウンをまとって献堂ミサを引き立ててくれました。

また、卒業生のご寄付によって設置された電子オルガンが、本物のパイプオルガンのような荘重な響きを奏でて、参列者を祈りに誘ってくれました。

どうぞ学生の皆様、いつでも聖堂に足を運び、静かな自分だけの時間をお過ごしください。ご自分と出会い、神様と出会う場となるよう、切に願っています。

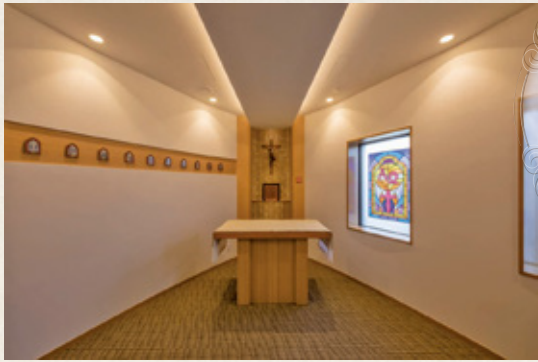
(カトリックセンター ニュースレター「ぶどうの木」第6号より)

献堂ミサ



慰霊祭





小聖堂



柱には14枚のレリーフ



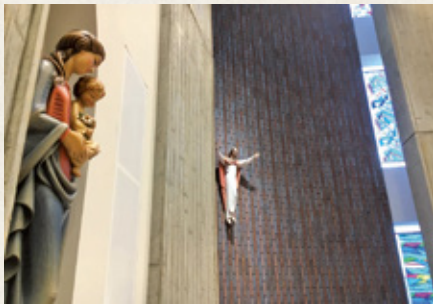
聖マリア
聖堂



1階 正面には、復活されたイエス様のご像



2階



聖母子像



2階 通路に展示されている藤学園の歴史



3階 F Link Space

チャペル棟
外観



前庭側



東側

~藤女子大学学生聖歌隊~

9月末に完成したチャペルに、聖歌隊の美しい歌声を響かせました。本学の宗教行事や諸行事に「藤らしさ」を響かせたいと思います。歌うことが好きな方、他の人たちとのハーモニーを楽しみたい方、宗教音楽に興味のある方を募集しています。練習日は現在、原則として水曜日16:30~17:30です。

*お問い合わせおよびお申込みは、北16条キャンパス学生課までお願いします。

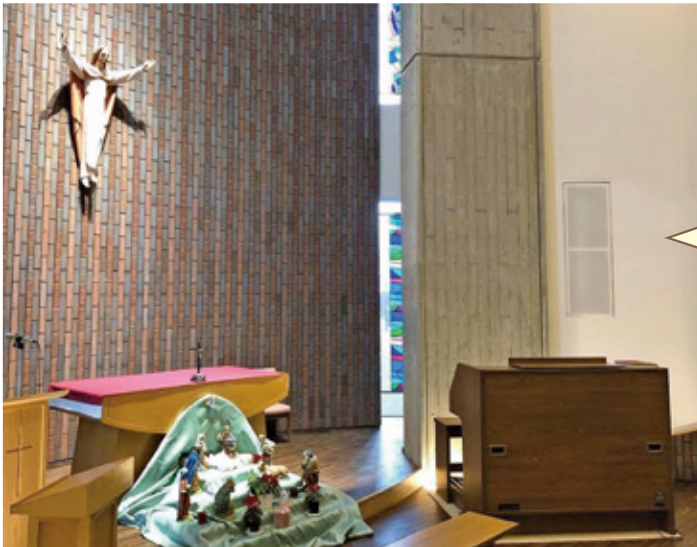


大学へのご支援ありがとうございます

藤女子大学の寄付募集活動は、みなさまの温かいご支援により、2012年度からの累計が1億4千万円に達しました。寄付募集につきまして深いご理解とご協力を心よりお礼申し上げ、ここに感謝の意を表しご芳名を掲載させていただきます。2018年度のご寄付につきましては、次号の広報「藤」にて、用途等をご報告いたします。

寄付者ご芳名 (第13回) 期間 2018年4月1日～2018年9月30日 (敬称略・お申込順)

〈保護者〉	〈卒業生〉	〈旧教職員・旧役員〉	〈教職員・役員〉	〈その他、法人等〉	
小澤 美和 澤井 篤司 植西 清 上杉 朗 清野 等	木村 浩 館岡 憲喜 矢部 公美 三上 修 米倉 昌雄	鈴木 伸二 藤崎 昇 匿名 18名 計 30名	千葉 啓子 吉積 禮子 阿部和加子 匿名 4名 計 7名	三浦 良一 田中 彌八 知地 英征 相原 宗一 橋本 伸也 高橋セツ子 匿名 3名 計 9名	高橋 清二 田口 恭子 計 2名 計 4名
計52件 9,790,000円					



北16条キャンパスのチャペルに卒業生より「復活のキリスト像」と「オルガン」の購入費用のご支援をいただきました。また、めぐみ会(卒業生カトリック信者の集い)より、クリスマスのご像(プレゼピオ)をご寄贈いただきました。

2012年度実績: 377件 12,081,866円	2013年度実績: 277件 17,413,757円
2014年度実績: 191件 76,223,954円	2015年度実績: 181件 6,402,354円
2016年度実績: 179件 16,758,365円	2017年度実績: 153件 10,983,201円
2012年4月～2018年9月末までの累計 149,653,497円	

学内ニュース

2018年6月～12月に下記の行事、講演会等を実施致しました。

- ❖ 藤女子大学 未来共創フォーラム2018【4回開催】
6月2日(土)、7月7日(土)、10月20日(土)、11月10日(土)
- ❖ 2018年度教職課程特別連続講座【5回開催】
6月2日(土)、6月30日(土)、7月14日(土)、10月27日(土)、12月1日(土)
- ❖ 第20回家庭科教育研修講座 7月21日(土)
- ❖ 英語文化学科主催 英語で楽しもう! Let's Enjoy English
8月8日(水)～9日(木)
- ❖ 藤女子大学公開講座 9月5日(水)
- ❖ キリスト教文化研究所公開講演会 9月15日(土)
- ❖ 実験動物慰霊式 9月21日(金)
- ❖ 聖マリア聖堂 献堂ミサ 9月28日(金)
- ❖ 藤女子大学 大学祭
第27回 藤花祭(花川キャンパス) 10月6日(土)～7日(日)
第55回 藤陽祭(北16条キャンパス) 10月13日(土)～14日(日)
- ❖ 食物栄養学科同窓の集い 10月6日(土)
- ❖ キリスト教文化研究所秋の公開講座 10月6日(土)
- ❖ 外国語教育研究センター主催 藤女子大学公開講演会 10月7日(日)
- ❖ 英語文化学科主催 English for Kids 2018 10月14日(日)
- ❖ 文化総合学科公開講演会 10月14日(日)
- ❖ 人間生活学部公開講座 10月28日(日)
- ❖ 慰霊祭 11月2日(金)
- ❖ 人間生活学部保護者懇談会 11月11日(日)
- ❖ 英語文化学科公開講演会 11月11日(日)
- ❖ 日本語・日本文学科特別公開講演会 12月26日(水)

心よりご冥福をお祈りいたします。

元藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 教授 大垣 直明 様



2018年9月8日ご逝去 76歳
1943年5月28日生まれ
京都大学工学部卒業、京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了、同博士課程単位取得満期退学。1972年から2009年まで北海道工業大学勤務。
2009年4月1日 藤女子大学人間生活学部教授として着任。
住環境デザイン・まちづくりがご専門で、居住環境デザイン、都市環境論等をご担当。
地域活動「ていね夏あかり」の企画・運営を通じ、学生のボランティア活動などの指導にもご尽力いただき、2012年3月31日退職。

ご寄贈ありがとうございます

文学部英語文化学科卒業生のご父母より、マリー・ローランサン「花冠の3人の若い女」の絵画をご寄贈いただきました。
北16条キャンパス1階マリアラウンジでご寄贈のプレートとともにご覧下さい。



教職課程では、2017年度から2018年度までの2年間にわたって、「北海道の教育」に関する特別連続講座（計11回）を開催してきました。2019年度から教職課程のカリキュラムが改訂され、本学では独自に選択科目として「北海道の教育」を置こうと考えています。その勉強のためにも、2年間にわたってこのような講座を開講しようと考えたわけです。

講座はすべて、土曜日の13:00からのおよそ2時間で行われました。11回の開催日と内容、そして講師の先生のお名前（敬称略）を掲げます。所属等は当時のものです。



第11回の様子

第1回	2017年5月27日	近代北海道の教育—初等教育を中心に— 坂本紀子(北海道教育大学函館校教授)	第7回	2018年6月2日	北海道の遠隔地教育 伊井義人(藤女子大学人間生活学部教授)
第2回	2017年6月24日	占領下北海道の教育改革 大矢一人(藤女子大学文学部教授)	第8回	2018年6月30日	北海道の大学・高校における異文化教育 青木麻衣子(北海道大学教育学部准教授) 佐藤千恵子(市立札幌大通高等学校教諭)
第3回	2017年7月22日	札幌市の教育行政—札幌市教育委員会の仕事— 宮地宏明(札幌市教育委員会生涯学習部総務課長) 國方大翼(札幌市教育委員会生涯学習部庶務課長)	第9回	2018年7月14日	北海道の特別支援教育 水野正司(NPO法人エトセトラ理事)
第4回	2017年10月15日	北海道の高校教育 中田貢(藤女子大学文学部教授)	第10回	2018年10月27日	北海道のアイヌ教育 中村和之(函館工業高等専門学校教授)
第5回	2017年11月4日	北海道の義務教育学校—中標津町立計根別学園の場合— 永谷隆夫(中標津町立計根別学園校長)	第11回	2018年12月1日	北海道の高校における特別支援教育 山崎恒平(北海道鶴川高等学校校長) 高橋江恵(北海道士幌高等学校教諭)
第6回	2017年12月2日	北海道の中等教育学校 —市立札幌開成中等教育学校の場合— 宮森正人(市立札幌開成中等教育学校教諭)			

これをみると、2017年度には、はじめに歴史的なことをおさえた上で、教育行政、そして学校種ごとの教育についての講演が行われています。2018年度には、教育内容を中心にする講演と、特別支援教育に関する2種の講演が行われています。

ここでは、10月27日に行われた「北海道のアイヌ教育」について、若干の内容をみてみましょう。中村先生は、まず「アイヌ史・アイヌ文化研究の歩み」を概観しました。アイヌを評価しようとした金田一京助らは、「ユーカラは叙事詩だからすごい」「アイヌは白人系だから偉い（それはその後、事実ではないことが分かった…筆者注）」という欧米との比較で事を論じている点を指摘し、「進歩主義」史観の見方を批判しました。その上で「教育におけるアイヌ史像」に進み、平成元年版の学習指導要領によって、高等学校日本史の教科書記述が非常に詳しくなったことを、その背景には発掘調査などの研究の進展があることを説明されました。また、中学校の国語の教科書に掲載された「銀のしずく降る降る」を紹介され、この教材は書き下ろしで、執筆者は藤本英夫であり、北海道大学出身で高校社会科の教員として長い間教鞭をとっていたことを説明されました。さらにご自分の研究をもとに、活発な交易を行っていたアイヌ民族の歴史を紹介されました。

「北海道の教育」と題した特別連続講座は今年度で終了しますが、来年度以降も本学教職課程では、卒業生・学生向けの教職に関する講座を開催していきます。卒業生の皆様には大学HPでお知らせします。また教員として勤務されている方には、『教職課程ニュース』でも予告や報告などもいたします。ふるってご参加いただければ、幸いです。



第10回の様子

藤女子大学は学生の様々なチャレンジを応援します!

フランススコ・ボランティアキャンプ



文学部
文化総合学科 3年
S.Kさん

私は異文化コミュニケーションのゼミに所属しており、勉強していく中で国際交流に興味を持ちました。フランススコ・ボランティアでは、ボランティアをしながら国際交流もできると思い、参加しようと決めました。参加者は、複数のグループに分かれて福祉施設や農村でボランティアを行います。私は農作業を支援するグループに入りました。今回は台湾で行われましたが、中国語もわからず、一人で参加するということが最初は不安が大きかったです。しかし、現地の大学生をはじめ韓国や日本からの参加者と、ボランティアの時間だけでなく、生活を共にすることで、たくさん交流することができました。日本での暮らしでは、中国や台湾、韓国の方々と親しく話す機会がなく、イメージだけで相手を見てしまっていたところがありましたが、今回の活動で一人ひとりと接していくことにより、今までのイメージはただのステレオタイプだったと気づかされました。勉強したことを経験にあてはめることができ、



より深く学びたいと思いました。他にも台湾や韓国の大学生は、日本語を勉強している人が多く、ボランティア中も現地の大学生が翻訳してくれました。それを見て、私は大学で学んだ韓国語も、小学校から授業で習っていた英語ですらも十分に話せていないことを改めて実感しました。今後、グローバル化していく社会に適応するためにも、語学や専門分野の勉強に力を入れようと思った貴重な経験となりました。国際交流ができるだけでなく、多くの発見が得られるフランススコ・ボランティアに参加でき本当に良かったと思っています。ここで得た発見を、就職活動や仕事に活かしていきたいと思っています。

フランススコ・ボランティアキャンプは、フランススコ教皇のメッセージに倣い、2016年度より実施されている国際ボランティア活動で、アジア諸国のカトリック系大学の学生交流プログラムとして毎年夏に開催されています。

石狩市インターン生活30日チャレンジ



人間生活学部
人間生活学科 2年
T.Aさん

私は夏休み期間中の1ヶ月を利用して石狩市主催のインターンシップに参加しました。このインターンシップは「地域商店街魅力化モデルプロジェクト」といい、全国各地から集まった他大学の学生と共に石狩市の商店街の活性化について話し合い、学生目線から解決策の提案をするという活動です。私がこのインターンシップに参加した理由は、就職に向けて焦りを感じ始めていたことです。夏休みはバイト



をしたい、友達と遊びたい、1ヶ月間は長いという気持ちもありましたが、先生からの後押しもあり参加を決めました。実際の活動内容は、商店街の中での就労体験、学生同士での話し合い、商店街の個人店の魅力アッププランの提出、お祭りでの出店、商店街全体の魅力化プランの制作、成果報告会です。商店街内での就労体験を通して商店街活性化への課題を見つけ、そこから地域の方々と話し合いを重ねて魅力化のプランを立て、地域に報告するという流れでした。

私は、活動を通して授業では得ることのできない学外からの刺激を受けました。特に毎日、他大学の学生と一緒に活動した中で経験値の差を感じたことは、私にとって特別な経験になりました。



今回のインターンシップに参加して将来に向けた明確な目標ができたわけではありませんが、自分がこれまでに経験したことがないことにも挑戦したことで視野が広がりました。今後はたくさんの人に出会い、自分にはない考え方や知識を増やしていくために、もっとこのような機会を見つけ、チャレンジしていきたいです。

素顔の先生 第9回

文学部 英語文化学科 准教授

チャールズ・ミューラー 先生



▲自宅にて

ホームタウンにある川でボートを漕ぐ▶



▲韓国の大学卒業



第9回「素顔の先生」は、文学部 英語文化学科 コミュニケーション系科目を担当なさっているチャールズ・ミューラー先生にインタビューを行いました。普段の授業ではお聞きすることのできない、私生活や学生時代についてなど貴重なお話をたくさんお聞かせいただき有意義な時間となりました。

※今回のインタビューは全て英語で行われました。

Q1. なぜ韓国の大学に行ったのですか？

アメリカに住んでいた頃、周りの農家によく外国人が出稼ぎに来ていました。頻繁に働きに来ていたのはメキシコ人などでしたが、時々アジアの方たちが来ていて、アジア人に興味を持ち、東洋哲学にも興味が湧きました。母国で韓国語を勉強している人が少なかったため、高校を卒業した後、1年間韓国語を学び、ソウル大学に入学し、4年で卒業しました。

Q2. なぜ北海道に来たのですか？

韓国を離れアメリカに戻った後、ずっと日本に興味を持っていましたので、名古屋の高校で教員を募集していた時に応募しようかととても悩みました。その時はあきらめたのですが、それでもいつかは日本に行きたいとずっと思っていました。そして、幼少時代、友達の家まで1マイルくらいあり、周りに4、5人ほどの友達しかいないような地方に住んでいたこともあり、私の地元に近い北海道に移り住みました。私は都会よりも自然が多いところが好きなので来てよかったなと思っています。

Q3. 休みの日はどのように過ごしていますか？

最近よくカフェで読書をしています。他には、人がいないような所に長期間のキャンプに行ったりします。ここ数年の間には、カナダに10日間1人で山に登りキャンプをしました。10日間で他の人に遭遇したのは、たったの4、5人だけで、しかもそのうち2日間は誰にも会いませんでした。見渡す限り自然ばかりで、人間が自分ひとりというのはとてもおもしろい経験でした。最近、そういった時間を取れていませんが、また行きたいと思っています。

また、同じ英語文化学科で教えているグレッグ先生と一緒にハイキングに行くこともあります。最近登った山

は定山溪の近くにある八剣山で、自然に触れてリフレッシュできました。

Q4. 日本の学生に教えるに当たって難しいと感じることは何ですか？

学習者にとってちょうどいい段階を選び、ステップバイステップで、分かりやすく伝えていくのが大切だと思いますが、非常に難しいです。学習者のバックグラウンドを常に知っているわけではないし、なにを言う必要があるのか、言う必要がないのかも知らないのが難しいのだと私は考えています。また、語学教育というのは、学習者がある言語を書いたり話したりしてたくさん使うことを確実にすることです。だから私は、興味が湧く話題を扱うなどして、学生が積極的にその言語を使えるように考えることがとても重要だと思っており、私が受け持つ授業の中には台湾の学生とオンラインチャットをしてもらう授業もあります。台湾の学生達は日本語を知らないで、必然的に英語を話すことで、自信が付き、同時に台湾についても学べるとても良い方法だからです。言語を学ぶ時に辛いことは、外国語を話すときにミスをしてしまい、まるで赤ん坊のような気持ちになることだと思います。私自身、日本語を話すとき、変なことを言っていないか、なにを言っているか分かってもらえるかなど不安になります。しかし、その恐怖を乗り越えることで言語は上達していくのです。教師達は学習者が緊張したり失敗を恐れたりする雰囲気を作らないようにすることも大切であり、教える上で難しいことです。

Q5. 今後の目標は何ですか？

第2言語習得について研究していて、これまでにそれについての論文を書きました。今後は本を出したいと思っています。



文学部
英語文化学科 3年
C.H.さん

今回のインタビューを通して、普段の授業では聞くことのできない、プライベートや学生時代の話から意外な一面を知ることができ、とても貴重な体験となりました。ミューラー先生のように目標を持ち、今後の学生生活を送ろうと思いました。



文学部
英語文化学科 3年
N.M.さん

普段は聞けない、少し踏み込んだプライベートな話を聞かせていただき、ミューラー先生の意外な一面を知ることができて、本当に貴重な体験になりました。お話を聞いて、興味や関心を持って行動に移すことが将来の糧になるのだと学びました。



文学部
英語文化学科 3年
Y.Y.さん

ミューラー先生には、とてもお世話になっています。今までは授業に関する会話を中心に、プライベートな話をあまりしなかったことがありませんでしたが、今回は先生の故郷や、学生時代の話も伺えて、とても新鮮で楽しかったです。

今回は、16世紀半ばのキリスト教と東洋との出会いです。日本に伝えられたキリスト教は多くの有力武士の信徒も獲得し、またさらに大勢の貧しい農民たちも獲得するにいたりました。

時の権力者たちにとって、キリスト教がもたらした大きな脅威は、信徒たちが身分の違いを超え、さらに支配者の垣根を越えて結びついていたことです。そこに権力者が危険を感じたのは想像に難くありません。

キリスト教の渡日から50年ほど経て始まったキリスト教迫害は、世紀が改まって17世紀になると、宣教師たちに対する迫害の厳しさはますます度を増します。宣教師の国外追放令が出されても、日本に残留して信徒たちの霊的な世話をする宣教師たち、密入国を試みて成功してもすぐに見つかり処刑される宣教師たち…。大勢の宣教師たちが命をキリストのために捧げました。そして日本人信徒たちも求められるまま仏教徒として寺の檀家に登録し、二重の生活をして生き延びました。宣教師不在の日本で、このように潜伏キリシタンによっておよそ七代にわたって子孫に信仰が伝えられました。

19世紀中頃、長崎他幾つかの港が開かれ、外国人居留地が設けられると、そこに外国人のための教会建設が認められました。1865年、長崎の丘の上に美しい大浦天主堂が建って間もないある日、浦上地方に潜伏していたキリシタンたち男女十数名

が見物を装い、聖堂で祈っているフランス人司祭プティジャン神父の傍に近づき、「サンタ・マリア様のご像はどこですか？」と囁いたのです。このときの司祭の驚きはどれほどだったでしょう。その他、この司祭が自分たちの先祖に伝えた司祭たちと同じ信仰の者であるかどうか、確認の質問を幾つかした上で、「私たちの胸、あなたさまと同じ胸です」と宣言したのでした。この出来事は世界にいち早く伝えられました。しかし、これがきっかけで更に「浦上四番崩れ」として知られる過酷な迫害が始まりました。

明治政府は欧米諸国からの圧力を受けて禁教令を解除し、カトリック、プロテスタント、ロシア正教など、たくさんの宣教師が来日しました。19世紀の終わりに日本におけるキリスト教の再宣教が始まったのです。



ベルナル・プティジャン神父



信徒発見のマリア像



元藤女子大学・藤女子短期大学 学長

土田 将雄様

＋ 心よりご冥福をお祈りいたします

1993年10月1日から1997年3月31日までの3年半に亘り、本学の学長として藤の教育のために大変ご尽力いただきました 土田 将雄 神父様が2018年10月26日にご帰天されました。

1923年1月16日東京都(旧東京市)生まれ。1946年11月25日イエズス会入会。1956年司祭叙階。1978年最終誓願。

慶應義塾大学経済学部卒業、上智大学文学部卒業、上智大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了、同神学研究科神学専攻修士課程修了、慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了、同博士課程満期退学。

1959年から1993年 上智大学勤務

1993年 上智大学名誉教授

1987年から1993年 上智大学 学長

1993年10月1日から1997年3月31日 藤女子大学・藤女子短期大学 学長

1997年から2006年 雙葉学園理事長

2008年 春の叙勲 瑞宝重光賞受章